

Title	モーシェ・コハヴィ教授講演会
Sub Title	
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1990
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.59, No.2/3 (1990. 7) ,p.168(338)- 181(351)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19900700-0169">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19900700-0169</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

期における名士、有力者層に関する若干の史料」(『オスマン朝史研究』第三号)等がある。

両氏は坂本勉が担当する大学院の「東洋史特殊講義」で学生を指導され、さらに一〇月一八日、午後五時より小泉基金の援助により大学院校舎三一三番教室において次の演題で講演をされた。

ヤブズ・エルジャン「オスマン支配と非ムスリコ、非トルコ人社会」

オゼル・エルゲンチ「オスマン朝の社会層位」

講演はヤブズ教授は英語、オゼル教授はトルコ語で行ない、トルコ語の通訳は鈴木 董氏(東京大学東洋文化研究所助教授)をお願いした。参加者は約三〇名、皆熱心に聞き入り、講演終了後の懇親会でも両氏を囲んで話がはずんだ。(坂本勉記)

### モーシエ・コハヴィ教授講演会

テル・アヴィヴ大学考古学研究所長モーシエ・コハヴィ博士は一九六四年以来、日本人によるイスラエル遺跡発掘に関するイスラエル側代表として、わが国聖書考古学界、古代オリエント史学界に大きな貢献をされてきた。一九八九年秋、同博士夫妻の二度目の来日の機会を利用して、小泉基金による講演会を開催した。日時は一〇月七日(土)午後二時より、場所は三田キャンパス大学院校舎二階三二五B教室、演題は「ガリラヤ湖東岸における最近の発掘」であった。

この講演の中で博士は、自らの立案になる「ゲシュール計画」

(Land of Geshur Project)という発掘調査の中間報告を行った(スライド映写付き)。このプロジェクトは、これまで聖書考古学的に未開拓であったガリラヤ湖東岸(ゴラン高原南辺)の青銅器時代・鉄器時代諸遺跡を解明しようとするもので、まずテル・アフィック、テル・ハダル、ラヴィアの三遺跡が対象として選ばれた。又、後には金石併用期の円形祭祀遺跡ロゲム・ヒリの調査もつけ加えられた。調査は一九八六年から一九八九年までの四シーズンにわたり、一九九〇年は休止、一九九一年から再開される予定である。

コハヴィ博士の今回の講演は主としてテル・ハダルの鉄器時代層を扱い、その聖書的背景にいたるまで論じられた。テル・ハダルの鉄器時代二層の発掘によって、古代イスラエルとダマスカスのアラム人とのゲシュールの地をめぐる対立抗争の実態が明らかになりつつある他、鉄器時代初期のゲシュール王国についても新事実が判明しつつある。又、テル・ハダルやテル・アフィックに近い同時代遺跡エン・ゲヴは一九九〇年より日本隊によって発掘されるが、それによってこれ等三遺跡の相互関係が解明されてゆくものと期待される。

講演会には日本オリエント学会名誉会長三笠宮殿下をはじめ本学の学生、他校の専門家など多数が出席し、盛会であった。終了後、殿下及び数名のグループが参加し、東門下中国飯店においてコハヴィ夫妻を囲む夕食会を開催した。

コハヴィ博士の「ゲシュール計画」については、本学民族学考古学研究室編「考古学の世界」(新人物往来社、一九八九)

中の小川英雄「ゲシュルとエン・ゲヴ遺跡」(五八四―五九六頁)参照。  
(小川英雄記)

平成元年度学部卒業論文題目

国史学専攻

(志水正司担当)

邪馬台国―倭人伝と考古遺物の語る―

中野 麻里子

仏教の伝来と受容について

木村 仁賢

日本古代の女帝とその特質

宮野 晃男

蘇我氏の登場と進出

升田 幸治

壬申の乱における東国と騎兵

小林 元

柿本人麻呂―和珥氏と宮廷歌の基盤―

浦城 義明

高松塚古墳

谷口 良夫

―東アジアの史的立場づけを中心に―

藤原竹麻呂

高橋 一郎

郡司の任用について

大森 邦弘

蔵人所の設置とその性格

清水 伸太郎

王朝女流文学の背景―紫式部を中心として―

滝沢 健

(三宅和朗担当)

九・十世紀の土地相論と国・郡衙

井内 誠司

―当該期国衙機能解明のための一考察―

『日本書紀』における東漢氏の動向について

木崎 克也

(高橋正彦担当)

海上船の風上帆走の可能性について

稲本 勝也

南北朝初期の守護制度について

宇津木 聡子

中世猿楽座の組織と機能について

奥原 徳浩

将門の乱における軍事構成について

小林 仁

起請文を通してみる中世

中島 美保

上野守護山内上杉氏と上野国人の関係について

中村 泰彦

戦国城下町の形成

宮林 宏幸

―甲斐国の事例を中心として―

北条氏政と大田氏房親子の岩付領支配について

渡部 篤史

―「太田氏証文」と「氏政証文」を通して―

(田代和生担当)

檀家制度の成立―寛永期を中心に―

寛文三年武家諸法度における殉死禁止令に関する一考察

大場 邦央

近世前中期の米価変動及び米価政策と元文の貨幣改鑄

古田 智子

幕末長崎の金融研究序論

江戸における土地売買と土地私有権について

田中 聖子

(柳田利夫担当)

織田信長の自己人格化と津嶋牛頭天王

比叡山焼き打ちと近江攻略

加藤 要一

外様大名の婚姻について

立石 木綿子

東京裁判におけるA級戦犯の被告選定過程と

赤木 妙子

大野 正貴

岡村 幸彦